# 『源氏物語』の「心の鬼」
# -「鬼」の表現をめぐって-


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学古代学研究所<br>公開日: 2021-03-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 湯淺, 幸代<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/21509 |

# 『源氏物語』の「心の鬼」―「鬼」の表現をめぐって

湯浅幸代

## 一　はじめに

『源氏物語』には、「心の鬼」という言葉が十五例(1)見られる。同様に、登場人物の心情や行動の理由となる心のありかたを示す「心の闇」「心の隔て」「心のすさび」といった語は、各十一例ずつ用いられている。「心の鬼」の語は、それらを上回る用例数であるところをみると、登場人物の心のありようを考える上で、やはり重要な語と言えるだろう。また、『源氏物語』以前の文学作品では、歌集や日記に数例あるのみで、一作品にこれだけの用例数をもつものは他に見当たらない。つまり、物語の特性を解明する上でも、鍵語となる可能性が高いのである。

そのため、「心の鬼」については、先行研究において検討が重ねられてきた。「心の鬼」は、主に「疑心暗鬼」(2)や「良心の呵責」(3)の意味で理解されてきたが、近年は『和名類聚抄』の記述にある鬼の原義（「鬼」を「隠」の転訛とみる）を重視し、「見えないもの」「心に隠しておきたいもの」「人に知られたくないもの」といった解釈がなされている(4)。このように、比較的広義な解釈がなされているのは、各用例で意味が揺れており、包括的に意義づけることが難しいためであろう。とはいえ、「心の鬼」が「心」の暗部を意味し、自分の意のままにできない「心」をまず「鬼」として認識する営みであることは確かである。「王朝人の内省的な視線から生まれた言葉」(5)、また「特に自己の心の内部を追求する女流作家の作品にふさわしい言葉」(6)とみる説などは、自らの心を見つめる語として「心の鬼」を位置づけている。さらに、『源氏物語』においては、この語が「密通」や「もののけ」（実体としての鬼）の事象と結びつき、人物たちの心の闇を効果的に表す例もあるようだ。

そこで本論では、まず、先行作品にみられる「心の鬼」の用例を確認しつつ、平安時代の王朝文学を中心に「鬼」そのものの描かれ方について検討する。その上で、「鬼」が「心」の中にいるとはどのような状態をいうのか。またそれらが実体化して「鬼」（もののけ）となる状況を踏まえながら、「心の鬼」の語について改めて考察してみたい。

## 二　『源氏物語』以前の「心の鬼」と先行研究

「鬼」という言葉は、奈良時代より見えるが、「心の鬼」の語は、平安時代の初出である。『日本書紀』や『万葉集』では、「鬼」が「モノ」「カミ」「シコ」とも読まれ、畏怖される神と対になる存在、一つ目や異形のもの、人を喰らう存在などとして登場する(7)。平安時代では、人から忌まれ、畏怖されるこの「鬼」が心の中に見いだされるようになる。ここでは、『源氏物語』以前の作品に見られる「心の鬼」の語について見ていきたい。次の用例は、韻文の初出となる『一条摂政御集』の歌である。

この女、いかなることをかいひたりけん、心の鬼にと、このおきなのいひたりければ

わがためにうときけしきのつくからにまづは心の鬼も見えけり

（『一条摂政御集』三七(8)）

この歌は、詞書によれば、まず男が女の言ってきたことに対し、「それはあなたの「心の鬼」だよ」と返したことから詠まれた女の歌であるという。またこの歌について、多くの注釈書は、「私に対して薄情な気配が見えたものですから私はすぐさま疑心暗鬼になったのです」と解釈している(9)。ただし、下句の解釈については、男を主語とし「（だから）あなたは私の「心の鬼」が見えたのです（私のせいにするのです）。」と解釈するものもある(10)。また「心の鬼」を男の心として「私はあなたが私と疎遠になりたい気持ちが見えます」とする説もあるようだ(11)。しかし、通常「心の鬼」は見えないものであり、それを指摘する男の不実をなじるのであれば、どちらを主語とするにせよ、やはり「女の心の鬼」のことを言っていると考えられる。「心の鬼」の語は、以下に見るように、『源氏物語』以前では、主に女性の心の内を指して言われているようであるのも参考にしたい。

おなじ所なる童を、見る人のものいふついでに、かひなるすいいをとりたれば、請ひにおこせたるをききて

①我にこそ心の鬼はつくれども誰にあひてかたまとしるらん

（『輔親集』・八五）

②としごとに人はやらへど目に見えぬ心の鬼はゆくかたもなし

（『賀茂保憲女集』一三〇）

ゑに、もののけつきたる女のみにくきかたかきたるうしろに、鬼になりたる元の妻を、小法師のしばりたるかたかきて、男は経よみて、もののけせめたるところを見て

③なき人にかごとはかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ

返し

ことわりやきみが心の闇なれば鬼のかげとはしるくみゆらむ

（『紫式部集』四四・四五）

鏡を借るに、「影をだにみせじ」などいひたる人に

④ますかがみ見えかくれする面影は心の鬼といづれまされり

（『能因法師集』四七）

①の歌は、詞書の本文が確定できないものの、女童と通じていた男が女の腕

につけていた「すいい（「く」か）」を取ってしまい、それを輔親の仕業かと女童が疑っていることを歌にしたと考えられる[12]。また②は、追儺で払われる鬼に対し、心の鬼は目に見えないためどこにも追いやれないと歌っている。さらに③は、『源氏物語』の作者・紫式部の歌として、物語との関連からも注目される。詞書によれば、もののけが憑き苦しむ妻の後ろで鬼となった元の妻を、法師が祈祷でしばり、夫が経を読んで責め立てる絵を見て詠まれたという。式部の歌は、「亡き妻のせいにして苦しんでいるが、それはみずからの「心の鬼」のせいではないか」と解釈でき、従来この「心の鬼」は「夫の心」と解されてきた。ところが森正人氏が「新しい妻の心」とする説を提唱し[13]、近年この説は支持を広げている。返歌にある「心の闇」が紫式部の心を指しており、また男女間において、心を痛めるのはおよそ女性側であることを考えれば、「妻の心」とする解釈には説得力がある。最後の④の歌は、鏡を貸してくれた女が「鏡に映った姿さえ見せまい」と言うので、「鏡に見え隠れするあなたの面影（私のことを思ってくれているから映る）と「鏡に映った姿さえ見せまい」というあなたの嫌な心（心の鬼）とどちらがまさっているのでしょう」の意となり、こちらもやはり男を厭う女の心を「心の鬼」として表現する。

また散文の初出となる『蜻蛉日記』においては、次のように作者が己の「心の鬼」について記している。

暗う家に帰りて、うち寝たるほどに、門いちはやくたたく。胸うちつぶれて覚めたれば、思ひのほかに、さなりけり。心の鬼は、もし、ここ近きところに障りありて、帰されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明かしけれ。

（『蜻蛉日記』下巻天禄三年閏二月十日[14]）

藤原兼家の妻であった作者は、突然の夫の来訪を、近くにある通いどころの女の都合が悪くて帰されたからではないかと思う。兼家はそのようなそぶりは見せないが、そんな思いがあるせいか、作者は夫と親しくできないまま夜を明かした。夫の来訪を素直に喜べない心のわだかまりは、「心の鬼」が思ったこととして記される。この「心の鬼」は専ら「疑心暗鬼」と訳されるが、そのような作者の心が他律的に書かれていることに注意したい。自分の心の内にあるわだかまりを「鬼」と表現して切り離す。このときの作者は、兼家の子を養女に迎え、知人からの賀茂詣での誘いに応じるなど、兼家との関係にのみ執着しておらず、徐々に自身の心を別事でも保ちつつあった。だからこそ、そのような気持ちは切り離したい、隠しておきたい「後ろめたさ」になったと考えられる。

また『枕草子』では、作者である清少納言が藤原斉信と親しくつきあうことについて、そうなれば「心の鬼出で来て、言ひにくくなりはべりなむ」[15]（「心の鬼」が邪魔をしてほめることが難しくなるでしょう）と述べている。ここでの「心の鬼」は「良心の呵責」と訳されるようだが、やはり自分の意（ほめたい気持ち）に反して、他律的な「心の鬼」が邪魔をするととれるだろう。清少納言でさえ、男性との関係において、このような「心の鬼」（後ろめたさ）について口にするのであり、方向性は違っても、やはり男女間に関わる「心の暗部」を示す言葉といえる。そして女性が自身で意識する場合には、特にそれを他律的なものとして己から切り離したい思いが見えるのではないだろうか。

## 三　『源氏物語』以前に見られる王朝文学の「鬼」

### 1　散文の場合

前節では、平安時代より見られる『源氏物語』以前の「心の鬼」の用例について検討したが、実際あまり用例は多くない。そこで、この節では、当時の「鬼」の描かれ方について見ていきたい。「鬼」については、『和名類聚抄』に次のよ

うに記されている。

〔和名於爾〕或説云隠字〔音於尓訛也〕鬼物隠而不欲顕形　故俗呼曰隠也
……。
（二十巻本系『和名類聚抄』元和古活字本[16]）

「鬼」は、「隠」の字が転訛したものであり、物に隠れて形を顕わしたがらない鬼の性質に起因するという。また奈良時代より見える「神との対比」「異形」「人を喰う」といった性質は、当時の作品の「鬼」にも見ることができる。『竹取物語』では、くらもちの皇子が自身の冒険譚を語る上で、自分を殺そうとした異国の人を「鬼のやうなるもの」と表現し、『伊勢物語』「芥川」には、女を一口に喰う鬼が登場する。またこれら様々な「鬼」の特徴を用いた表現は、『うつほ物語』と『枕草子』に集中して多くみられる。まず、『うつほ物語』の用例[17]から検討したい。

＊以下〔　〕内は、「鬼」にたとえられているもの、また「鬼」の語が用いられる状況を説明する。

①鬼の目を潰しかけたるやうなる手にて（『うつほ物語』「藤原君」九八頁）
〔三奇人の一人・滋野真菅の筆跡について〕

②鬼、獣のくふ山に交じりたる心地して
（『うつほ物語』「嵯峨の院」一九一頁）
〔他の裕福な娘の室内を見る仲頼の心情〕

③「あやしき者の子・孫、顔かたち鬼のごとくして、頭は直白に、腰は二重なる嫗なれど、猿を後方手に縛る者と言へ、徳ありし者の妻ぞ、子ぞといふ者をば、天下の人も、え聞き過ごさで」
（『うつほ物語』「嵯峨の院」一九五頁）
〔醜い姿・形でも財産がある女に求婚する世の風潮を忠保の妻が語る〕

④「あはれにも、失ひたる人こそあなれ」。北の方、「あなむくつけや。それは、鬼の声ぞせむ。これは、人の声にこそあなれ」とはのたまへど、それなりけり。
（『うつほ物語』「菊の宴」三四七頁）
〔妻が自分たちを捨てた夫・実忠の声を「鬼の声」とし、この声は人違いだろうとやり過ごす〕

⑤「……。これに御手一つ遊ばして、鬼逃がさせたまへ」と聞こえたまへば
（『うつほ物語』「蔵開上」四七六頁）
〔空の様子が騒がしいので仲忠が琴の名手である母に鬼神を鎮めるよう演奏を促す〕

⑥昔は、鬼にもこそは賜ひけれ。
（『うつほ物語』「蔵開上」五一〇頁）
〔女一宮が不出来な自分と仲忠との結婚に対し「昔は鬼にも（そのような）娘を与えたそうです」と話す〕

⑦中納言、「帝の御娘得たれば。誰かは、御前に入り臥すらむ。何かは、先祓へられて、鬼も神も、急ぎてはやらひあるくべき」。
（『うつほ物語』「蔵開下」五七七頁）
〔仲忠が妻の寝床に臥す様子を聞き、他の人は誰もそのようなことはで

きない、先払いもなされるから、鬼も神も急いで追い祓う必要はない、と源涼が揶揄する〕

⑧「誰かは、宮にある人の限り、この盗人をよしといふ。人は幸ひの鬼にこそあめれ。」

（『うつほ物語』「国譲中」六九八頁）

〔東宮妃の一人である宮の君は、寵愛を一身に集める藤壺のことを「盗人」と言い、幸せを奪う「鬼」であるという〕

⑨「いみじき岩木・鬼の心なりとも、聞きては涙落とさざらむや」と聞こゆ。

（『うつほ物語』「楼の上」九三四頁）

〔俊蔭の女の琴の音の素晴らしさを形容する人々の言葉〕

以上が『うつほ物語』にみられる「鬼」の用例である。①～③は、異形の鬼の醜さ・野蛮な様を筆跡や金持ちの娘にたとえ、④と⑧は、自分たちを捨てた憎い夫、愛する人を奪った恋敵が「鬼」と称される。これらは主に人を鬼にたとえた表現である。実は『伊勢物語』には、もう一例「鬼」の語がみられ、それは荒れた宿に隠れている女性らを「鬼のすだく」[18]と歌うものである（『大和物語』[19]にも同様の例が一例みられる）。このような「隠れる鬼」のイメージとは異なり、『うつほ物語』では、主に「鬼」の恐ろしい形相・あり方から憎むべき相手を「鬼」と称する例が多い。また⑥は例外的に昔話の鬼を語るが、それ以外の⑤⑦⑧⑨は、神との関係性が意識される「鬼」である。このことは、この物語が天人から弾き伝えられた琴の秘曲を伝授する一族の物語であることが大きく関わっていよう。『古今和歌集』序にみえる「鬼神をも哀れと思はせ」る歌の効用と同じく、琴の弾奏は天に通じ「鬼神」をもなぐさめるものとなる。ともに礼楽思想を下敷きとするがゆえに引き寄せられた「鬼」である。このように、「鬼」の語の用いられ方は、『うつほ物語』という作品自体の特徴をも顕わにしている。次に『枕草子』の用例を検討してみたい。

①蓑虫、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似て、これも恐ろしき心あらむとて、親のあやしき衣ひき着せて、

（『枕草子』四一段）

②職の御曹司におはしますころ、木立などのはるかにものふり、屋のさまも、高うけ遠けれど、すずろにをかしうおぼゆ。母屋は鬼ありとて、南へへだて出だして、南の廂に御帳立てて、又廂に女房はさぶらふ。

（『枕草子』七四段）

③小法師ばらの、持ち歩くべうもあらぬ鬼屏風の高きを、いとよく進退して、畳などをうち置くと見れば

（『枕草子』一一六段）

④藤大納言の手のさまにはあらざめり。法師のにこそあめれ。昔の鬼のしわざとこそおぼゆれ」など、いとまめやかにのたまはすれば

（『枕草子』一三二段・定子の言葉）

⑤「使に行きける鬼童は、台盤所の刀自といふ者のもとなりけるを、小兵衛が語らひ出だして、したるにやありけむ。」

（『枕草子』一三二段・一条天皇の言葉）

『枕草子』では、「鬼」そのものの用例は②だけである。その他はすべて比喩、あるいは形容詞的に「鬼」の語が用いられている。④は、『うつほ物語』の①同様、筆跡の拙さについての比喩であり、③と⑤は、鬼のような特徴（「大きい」

などか）を持つとして形容詞的に用いられたものである。また①については、蓑虫が、身を蓑で隠しており、「鬼」の隠れるあり方と共通することからの発想であると思われるが、「鬼」の子だから「恐ろしき心あらむ」との言葉は、鬼が恐ろしいものであり、それは恐ろしい心に起因することを示している。そしてこの「恐ろしい鬼がもつ恐ろしい心」という考えは、逆に「恐ろしい心が恐ろしい鬼を成す」という発想にも通じよう。先述した通り『うつほ物語』には、憎い相手を「鬼」と称する例がみられたが、④の「実忠」や⑧の「あて宮」は、容姿ではなくむしろその「行動」（実忠は家族を捨て、あて宮は愛する人を奪った）を以て「鬼」と呼ばれている。つまり、人の「情」を解さない「行為」・「心」が「鬼」として認識されているのである。

以上のように、「鬼」の表現そのものも、この時代に広がりを見せ、作品の特徴を示す表現となりえていることがわかる。この他、散文作品では、『蜻蛉日記』に追儺の鬼を指す例が一例[20]、『平中物語』に親が自分の娘と私通しようとする男を鬼に例える例が一例[21]、『落窪物語』に姫君を虐めてきた北の方を夫である中納言が「鬼心の人」と称する例が一例[22]見られる。

## 2　韻文の場合

一方、和歌においては、次のような歌が詠まれている。

一条がもとに、いとなん恋しきといひにやりたりければ、鬼の形をかきてやるとて　　一条

①こひしくは影をだに見てなぐさめよわがうちとけてしのぶかほなり

返し　　伊勢

②影見ればいとど心ぞまどはるる近かからぬけのうときなりけり

（『後撰和歌集』九〇九・九一〇）

みちのくになとりのこほり黒塚といふ所に、重之がいもうとあまたありとききて、いひつかはしける　　かねもり

③みちのくのあだちのはらの黒塚に鬼こもれりときくはまことか

（『拾遺和歌集』五五九）

まず『後撰和歌集』の贈歌①は、自分を恋しく思ってくれる人に、その人を偲ぶ顔として「鬼」の絵を送り、その絵を見てなぐさめるよう（これで自分を嫌いになってもらおうと）言ってよこす歌である。一方その返歌②は、絵だけでは本人の「気」が遠いのでかえって心が惑うと詠まれている。双方、和歌自体に「鬼」の語は見えず、また一条は伊勢が恋しく思わないようにあえて「鬼」の絵を贈ったとされるが、逆に「鬼」のような顔になるほどの思いを一条が抱いていたとも言えそうである。女性同士の贈答ではあるが、互いの愛情は「鬼」を介してなされるほど深い様が窺える。また『拾遺和歌集』③の歌は、重之の妹たちが深窓の姫君（隠されている）ゆえに「鬼」にたとえられたものである。『伊勢物語』同様、姿が「見えない」「見せない」鬼からの発想である。さらに私家集においては、以下のような例が見られる。

同年つごもりの夜なの陣をみて

①鬼すらも宮のうちとて簑笠をぬぎてや今宵人に見ゆらん

（『躬恒集』一八五）

進のきみのもとに、そねむなどいへば

②ながき夜を消えかへりては嘆くらむいきどころある鬼はたのまじ

（『大斎院前の御集』三〇一）

①の歌は、追儺の鬼が目に見えることから「宮中では鬼さえも簑笠（姿を隠すもの）を脱ぐのか、今夜は人に見えるらしい」と歌う。②の歌は、「進」という女房のもとに「嫌い」と言い送ったところ、返ってきた歌で「無明の闇のような長い夜を死にそうなほど嘆いたとのことですが、生きる場所のある鬼の言うことなど信用いたしますまい」[23]といなしている。①は、宮中では鬼も人と同様、簑笠を脱ぐらしい、と歌い、②は、嫌なことを言ってきた人を「鬼」にたとえる歌である。

「芥川」鬼一口の「鬼」も、実は後から「高子の兄たちをたとえたもの」との語り手の種明かしがあるように、和歌や歌物語においては、「鬼」そのものというよりは、人と鬼を同化させるような表現が多いようである。これらは、人の心を表現することに軸を置く和歌ならではの「鬼」表現のあり方と言えるだろう。

他にも平安時代には、奈良時代の『日本霊異記』同様、『法華験記』などの仏教説話集において、主に人を喰う「鬼」が登場するが[24]、後に地獄の獄卒の「鬼」が絵として描かれ、人々に浸透していった様子も窺える。

絵に、死出の山に、鬼に追はれて女の泣きて越えし

作りこし罪をともにてしる人も泣く泣く越ゆる死出の山かな

（『弁乳母集』七二）

ここでの「鬼」は、罪人を苦しめる「地獄の鬼」であることが詞書から読み取れるが、『源氏物語』の「心の鬼」も、結果的に「心の暗部」としての「鬼」に、本人が苦しむよう描かれる場合がある。特にそれは高貴な女性の例であるが、自分の「心」でありながら思うようにならず、その「暗部」が他律的に動いて己を苦しめるのである。そういった「心の鬼」の描かれ方は、先行研究に指摘がある通り[25]、地獄の獄卒の鬼とも関わりがあるのかもしれない。

以上のように、『源氏物語』以前に見られる平安時代の「鬼」の表現には、その広がりとともに、作品ごとの特徴が見えていた。特に人（他者）を鬼にたとえる場合、人としての「情」を持たない憎い相手が「鬼」とされ、いわば見た目からは判断できない「鬼のような人」が現われることには注意したい。それは「心」に「鬼」を宿すこととも関わってくるだろう。

さらに、このような「鬼」の「見える」「見えない」といった特徴から、「人」と同化していくありようも重要である。『躬恒集』の歌は、追儺の鬼が目に見えることについて、宮中では鬼も人と同様、簑笠を脱ぐらしい、と言い、『伊勢』『大和』『拾遺集』では、隠れている女たちが「鬼」にたとえられていた。特に後者の例は、「深窓の姫君」と「鬼」との間に一見齟齬があるようにも感じるが、「心の鬼」の初期の例がほぼ男女間における「女の心」を表すところを見ても、やはり「見えない鬼」については積極的に「女性」と結びつく要素があったと考えられる。

## 四　『源氏物語』の「鬼」

前節で検討した通り、『うつほ物語』や『枕草子』では、様々な形で広がりを見せた「鬼」の表現であるが、『源氏物語』には「鬼」の語が二十七例用いられている。正編では、「帚木」三例、「夕顔」二例、「若菜下」二例、「夕霧」五例の計十二例であり、残りの十五例は宇治十帖に集中する。特に「蜻蛉」に五例

「手習」に七例もあるのは、浮舟失踪の原因、あるいはその後の発見と関わり、積極的に物語に「鬼」が呼び込まれるためである。それでは、正編に見られる「鬼」の語にはどのような特徴があるのだろうか。

最初に「鬼」の語が見られるのは、帚木巻である。雨夜の品定め中、左馬の頭の話の中で「人の見及ばぬ蓬莱の山、荒海の怒れる魚のすがた、唐国のはげしき獣の形、目に見えぬ鬼の顔などのおどろおどろしく作りたる物」(26)と、絵の題材の一つとして語られる。「目に見えぬ」とあることから、本来「鬼」はやはり「見えないもの」として認知されていたことがわかる。一方でいざ描かれるとなると「おどろおどろしく」異形な姿であったようだ。続く式部丞の体験談では、悪臭のする薬草を服用した博士の娘について語られるが、その話を聞いた君たちは「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひゐたらめ。むくつけきこと」(27)（そのような女がいるわけがない、それはおとなしく鬼を相手にしたほうがましだ。気味が悪いこと）と述べている。ここでは、ひどい有様の「女」に対し、「鬼」が引き合いに出される点、注意したい。また同巻の後半は、この品定めにより中流階級に興味を持った光源氏と受領の後妻・空蟬との逢瀬が描かれる。そこで光源氏が「鬼神も荒だつまじきけはひ」だったことから、源氏の侵入に対し、空蟬は声を上げられなかったと語られる(28)。ここでは「神」と関わる「鬼」の語がみられるが、光源氏の美質・魅力を言うための語として機能している。さらに夕顔巻では、光源氏が夕顔を廃院に連れ出した際、「け疎くもなりにける所かな。さりとも、鬼なども我をば見ゆるしてん」(29)（気味が悪く鬼でも出そうなところであるが、自分は見逃してくれるだろう）と、後に夕顔がもののけに取り殺される伏線となるような発言をしている。この後、もののけが現われ、夕顔の息が絶えた際には、再び「南殿の鬼のなにがしの大臣おびやかしける例を思し出でて」(30)と、『大鏡』にも見える鬼の話が光源氏により想起される。夕顔巻では人を襲い、命を奪う「鬼」の語が、「もののけ」とほぼ同義で用いられているのである。

以上のように、すでに帚木三帖において、平安時代に見られる様々な「鬼」の特徴―「目に見えない」「異形」「女性の比喩」「神との対比」「人を喰う」が見いだされる。また若菜下巻の二例は、六条院で催される女楽の合間に光源氏が「琴」の効用を語る場面のもので、「鬼神の心をやはらげ」「かの鬼神の耳とどめ」(31)など、『古今集』『うつほ物語』の例と同様、礼楽思想に関わる用法と言える。

また正編における「鬼」の語は、夕霧巻に頻出する。

＊以下〔　〕内は、引用本文の説明。

①「らうたげにものたまはせなす姫君かな。いと鬼しうはべるさがなものを」
〔夕霧の花散里に対する発言〕　（「夕霧」四―四七〇頁）

②鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにもの清げに若う盛りににほひを散らしたまへり
〔夕霧の噂を聞いた光源氏の心中〕　（「夕霧」四―四七一頁）

③「いづことておはしつるぞ。まろは早う死にき。常に鬼とのたまへば、同じくはなりはてなむとて」とのたまふ。
〔雲居雁の夕霧に対する発言〕　（「夕霧」四―四七二頁）

④「御心こそ鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、え疎みはつまじ」
〔夕霧の雲居雁に対する発言〕　（「夕霧」四―四七二・四七三頁）

⑤「かく心幼げに腹立ちなしたまへればにや、目馴れて、この鬼こそ、今は、恐ろしくもあらずなりにたれ。神々しき気を添へばや」

〔夕霧の雲居雁に対する発言〕　（「夕霧」四―四七三頁）

夕霧巻では、筒井筒の恋を実らせた夕霧と雲居雁夫婦の危機が語られている。この頃、夕霧は、亡くなった友・柏木の妻である落葉の宮に懸想しており、その様子に雲居雁をはじめ、周囲は困惑していた。①は、夕霧の後見人・花散里から発せられた雲居雁に同情する言葉をうけての夕霧の発言であり、②は、夕霧の姿を見て「鬼神も罪ゆるしつべく」と、夕霧の魅力を再確認する光源氏の心中である。また③～⑤では、あからさまに嫉妬する雲居雁を夕霧が「鬼」と呼び、さらに本人も「死んで鬼になる」と言っているが、雲居雁の場合、六条御息所のように内に抑えきれない「もの思い」からもののけ化することはなさそうである。ただし雲居雁の言葉③は、男女関係に悩む女が死んで「鬼」となりうる可能性を示唆していよう。また夕霧の言葉④は、雲居雁の「心」の方が「鬼」より怖いと述べており、実際、「心」に隠された「鬼」の方がより恐ろしいことを感じさせる。

このような夕霧夫婦の会話に見られる「鬼」の語は、男女関係に悩む女性たちの「心の鬼」が導くもののけ化の傾向（後述する）とは逆に、夫婦関係を取り繕う言葉として機能している。女が目に見えて嫉妬し、「鬼」となることにより、むしろ関係性が保たれていくのである。

このように、正編においては、六条院で語られた「琴論」を除き、主に主人公・光源氏の生活圏外（特殊な状況下）で「鬼」の語が用いられていると言える。そのように考えると、全用例の半数以上が宇治十帖に集中してみられることにも理由があろう。つまり「鬼」の存在が意識されるのは、都のような「中心」ではなく、宇治・小野といった「周縁」においてなのである。

また特徴的なのは、浮舟失踪後の「鬼」の用例であり、浮舟の乳母、母・中将の君、薫といった人々から、浮舟の失踪が「鬼」の仕業として意識されることである[32]。そしてこのように物語に呼び寄せられる「鬼」は、説話や歌物語の話をなぞる形で思い起こされ、最終的には浮舟の死を認定していく過程として機能する。また、小野で見つかる浮舟自身、僧都一行から「鬼」と間違えられるが[33]、失踪直前の浮舟も「をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよ」[34]と、鬼に食べられることを願っており、その後も「鬼のとりもて来けんほどは」[35]と自分の失踪に「鬼」の介在があったように考えている。

つまり、浮舟にとっては、もの思いからの解放が「鬼」に託されていたことが知られ、さらに己自身「鬼」と同化したようにも描かれているのである。いわば、「鬼」に命を奪われることを望むヒロインが物語の終末に誕生したことになる。このような人物の招来について考えるためには、正編における「もの思い」と「心の鬼」の関係性、「密通」や「もののけ」について改めて検討する必要があろう。

## 五　『源氏物語』の「心の鬼」―正編の場合

前節では、『源氏物語』に見られる「鬼」の用例を検討した。他作品同様、「目に見えない」「異形」「女性の比喩」「神との対比」「人を喰う」といった「鬼」の特徴が『源氏物語』にも見えるが、「心の鬼」の語との関わりで言えば、女性の嫉妬心から女性を「鬼」にたとえる例、また夕顔巻や宇治十帖で言及される命を奪う（人を喰う）「鬼」のあり方に注意すべきだろう。特に後者は「もののけ」との関連が深く、最後に浮舟が自身の「もの思い」から「鬼」を呼び寄せたようであるところも興味深い。しかし、全体的に見れば、「鬼」の語は、都の周縁に現われ、特に主人公の生活圏には存在しない。しかし、「心の鬼」につい

ては、「ゆくかたもなし」と歌われたように、心の内に留まり続ける。その存在を認識しながら切り離すこともできず、次第に己自身がその「鬼」に追いつめられていくのである。

＊〔　〕内は誰の「心の鬼」かを示す。以下も同じ。

①さるは、いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりをまさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか、と思しつづくるに、身のみぞいと心憂き。〔藤壺〕

（「紅葉賀」一―三二六頁）

②里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ〔六条御息所〕

（「葵」一―五二頁）

①は、光源氏との密通によって誕生した皇子が、源氏にそっくりであることを確認した藤壺の心中を表現する。「御心の鬼に」という言い方は、先行研究でも指摘されるように[36]、これまでとは異なる用法である。散文では、『蜻蛉日記』や『枕草子』の例のように、「心の鬼は」という形で主語となり、自分とは別の主体として「心」のありようが表現されていた。しかし『源氏物語』では、その「心の鬼」を原因・理由とし、登場人物が追いつめられる様子を表現する。物語では、語り手が登場人物の心について、他律的な「心の鬼」により当事者も苦しめられている、と語るのである。名もなき語り手が高貴な人物たちの心のありように言及しようとすれば、自然、当事者に寄り添う体になるのかもしれない。ともかく物語で初例となる『源氏物語』の「心の鬼」の語は、后腹内親王で中宮位にある最も高貴な女性の心中に用いられる。外からは見えない、知られてはいけない密通による不義の子誕生という秘密から生まれた心の暗部が、同じく見えない「鬼」を呼び込むのである。しかし、帝と並び都の中心に位置する中宮の「心の鬼」は、抑え込まれねばならない。藤壺の苦しみが、この「御心の鬼」の語によって、如実に示されている。

また続く②の例は、思いつめた六条御息所がもののけとなり、葵の上を襲ったことを源氏が知っていると気づき、動揺する御息所の心中を表している。源氏の手紙に自分のもののけ化を知られたことを読み取ったのは、「心の鬼」によるのだとの説明は、確かに「良心の呵責によりそのことに気づいた」と「心の鬼」の語を解釈できそうである。しかし、この本文は、「心の鬼に」との説明がなくとも、「しるく見たまひて」（はっきりおわかりになって）と続けられるところである。それをわざわざ「心の鬼に」と書くのは、御息所とは別の何かが、葵の上の元に赴き、その「鬼」のために、源氏の文中からそのような事態が読み取れたと言いたいのだろう。「もののけ」という、まるで心から抜け出た「鬼」というべき存在は、「心の鬼」の語により、御息所その人とは、別の主体のものであったかのように語られるのである。

このように、『源氏物語』における「心の鬼」の語は、まず、不義の子を生んだ后と、もののけ化した高貴な女性の心中に用いられており、双方、大変重いテーマを担う中での表現と言える。しかしその後の五例は、光源氏三例[37]、冷泉帝一例[38]、夕霧一例[39]、とすべて男性に用いられており、一部、密通に関わるものもあるが、深刻でない例もある。ところが若菜上巻に入り、再び女性の心中に「心の鬼」の語が見られるようになると、特に柏木・女三宮密通事件を契機とし、この語は人々の心中に波紋のように広がっていくのである。

①あまり久しき宮居も例ならず、人や咎めむ、と心の鬼に思して入りたまひぬれば〔紫の上〕　（「若菜上」四―六七頁）

②宮は、御心の鬼に、見えたてまつらんも恥づかしうつつましく思すに、ものなど聞こえたまふ御答へも聞こえたまはねば〔女三宮〕　（「若菜下」四―二四六頁）

③人々の参りしに、事あり顔に近くさぶらはじと、さばかりの忌をだに、心の鬼に避りはべしを。〔小侍従〕　（「若菜下」四―二五一頁）

④いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御気色もなく、かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか。〔柏木〕　（「柏木」四―三一七頁）

⑤宮の若君は、宮たちの御列にはあるまじきぞかしと御心の中に思せど、なかなかその御心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひよせたまふらんと、これも心の癖にいとほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひかしづききこえたまふ。〔女三宮〕　（「横笛」四―三六四頁）

まず、①のように、紫の上の心中に「鬼」が生じる。紫の上は、女三宮降嫁を受け、六条院の女主人、また光源氏の正妻的立場から退くこととなった。光源氏の夜離れなど、これまで経験のなかった紫の上は、つい夜更かしをしてしまう。しかしそのことを女房にとがめられるのではないか――ひいては自分の心の動揺を悟られてしまうのではないか、という思いが、「心の鬼」の語で表現される。紫の上は、この後もなかなか寝られず、周囲の人にそれを知られぬよう身じろぎもしないので、「なほいと心苦しげなり」と語られている。その直後、女三宮の元で就寝していた光源氏の夢に紫の上が現われる。しかも「かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの御夢にみえたまひければ」と、紫の上の心の乱れが、源氏に夢を見せたかのように語られるのである。当時の夢は、夢見た自分ではなく、相手の思いにより見るものとの認識があるが[40]、それでもこのような語られ方は、六条御息所の「もののけ」のように、心の内に留められない「鬼」が、源氏のもとへさまよい出た可能性を思わせるものであろう。

その後、②～⑤は、すべて柏木と女三宮の密通事件を経た後の例である。②は、密通後の女三宮の心中を表し、光源氏に会うことも憚られ、また話しかけられてその返事をすることも、気が咎めてうまくできないという。事態としては深刻であるが、源氏の方は、最近、病気の紫の上の元にいることが多く、不在がちであるのを宮が恨んでいるのだと誤解している。宮に生じた「御心の鬼」は、一見、藤壺のものに近いが、この「心の鬼」が③のように「小侍従」にも生じているところを見ると、「鬼」を生み出す「闇」（心の暗部）自体は、露見を可能とするような軽い意味に置き換わっているようだ。実際、④で病気になった柏木に対し、「いかなる御心の鬼にかは」と問う夕霧は、柏木の「闇」を見透かしており、⑤では、光源氏が女三宮の「御心の鬼」を気にして、薫の扱いを他の宮と異ならないように注意している。つまり、ここでの「心の鬼」は、当人の心の奥深くに抑え込まれる性質のものではなくなってしまっているのである。このことは、光源氏・藤壺密通事件と柏木・女三宮密通事件との差異を示しており、さらに、人の「心の鬼」に同化して入り込む六条御息所の死霊を跳梁させる結果を招いた。正編における「心の鬼」の語は、密通とももののけに関わり、物語自体の質的差異や、「心の鬼」に耐えられない人々が滅びていく様子まで、克明に描くことを可能にしている。

## 六　『源氏物語』の「心の鬼」―続編の場合

『源氏物語』の続編とは、匂宮三帖と宇治十帖を指し、光源氏没後の世界を描くが、「鬼」の用例が宇治十帖に集中するように、「心の鬼」の語も宇治十帖に三例見える。

①「……うしろめたげに気色ばみたる御まかげこそわづらはしけれ」とて笑ひたまへるが、心恥づかしげなる御まみを見るも、心の鬼に恥づかしくぞおぼゆる。〔中将の君〕　（「東屋」六―七五頁）

②……ふと人づてに聞こしめさむは、なほいといとほしかるべきことなるべし、とこの人二人ぞ、深く心の鬼添ひたれば、もて隠しける。〔浮舟付き女房二人〕　（「蜻蛉」六―二一四頁）

③……あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さすがにいみじと、ものを思ひ入りけんほど、わが気色例ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけんありさまを聞きたまひしも、〔浮舟〕　（「蜻蛉」六―二六〇頁）

以上のように、三例とも浮舟物語に関わる人物の心中を表している。まず①は、浮舟を子供のように心配する母・中将の君をいなす中の君の発言に対し、昨晩の出来事（中の君の夫・匂宮が浮舟に迫った事）から、気づまりな思いをする中将の君の心中を示す。異母姉の夫を寝取りかねない娘・浮舟の様子はあくまで秘されなければならない。まだここでは密通に至らないものの、危機感をもった母は、浮舟を中の君の元から移動させる。②は、浮舟失踪を知った女房二人の心情を示し、浮舟が薫の愛を受けながら匂宮と通じたことに悩み、身投げしたかもしれないことをひた隠しにしている。「深く心の鬼添ひたれば」という言い方は、物語中、初めてであり、「心の鬼」が元の心に生じたというよりは、外から侵入した鬼が憑いて、そのような行動をとらせたような印象を受ける。また③は、失踪前の浮舟の様子を聞いた薫の述懐中の記述である。匂宮との仲を知って冷たくなった自分の様子を、浮舟が自らの「心の鬼」（後ろめたさ）により、嘆き沈んでいたという話は、周囲の女房から聞いたものとされる。このように、続編においても「心の鬼」は人に知られ、その鬼を宿していたものは滅びる運命をたどるかのようである。確かに浮舟の場合、「心の鬼」――もの思いの苦しみから逃れるべく、「鬼」に喰われることを望み、失踪後は、浮舟自身が「鬼」のように見られ、本人も自らの失踪に「鬼」の介在があったことを自覚している。

しかし、最後の薫の用例には、同じく密通を知った光源氏が女三宮の心中に配慮する用例と近く、それとの差異から別の解釈もできよう。女三宮は実際に「心の鬼」を感じていたとして語られるが、浮舟にそのような記述はない。浮舟は薫の前から消えており、そのことを確かめるすべはなく、実際、浮舟は薫のためだけに苦しんでいたのではなかった。浮舟は、匂宮、薫、母・中将の君、様々な人を思いながら、川の側へ歩み寄っている。しかも浮舟は、匂宮と中将の君にだけ、辞世の歌を詠むのである。薫への思いはいかほどのものであったか。薫に思い返される浮舟の「心の鬼」は、むしろ自らを慰撫するために用いられた言葉であったかもしれない。

## 七　結語

以上、『源氏物語』の「心の鬼」の語について考察すべく、王朝文学を中心に「心の鬼」と「鬼」の用例について検討した。物語以前に見られる「心の鬼」

は、用例が少ないものの、主に男女間に関わる女性の「心の暗部」を示し、女性自身が意識する場合は、特にそれを他律的なものとして切り離したい思いが見えた。「心の闇」を「鬼」のせいにするわけではないが、『源氏物語』に描かれる高貴な女性たちの心に生じる「鬼」との共通点が窺える。また元々の「鬼」の例については、平安期以前から確認できる「神と対比される存在」「異形のもの」「人を喰らう存在」の他、『和名類聚抄』に記されるような「見えないもの」「隠れているもの」という特徴が明確であった。これらの特徴は、「見えない心」との同化を進めることになるが、『うつほ物語』や『枕草子』において、作品の特徴を表すほど「鬼」の用法が広げられたことは重要である。特に、高貴な人物たちも、情のない人は「鬼」と言われていることについては、心に「鬼」を宿していく高貴な人物の登場を予感させる。中でも深窓の姫君が隠れている「鬼」とたとえられることも、その違和を越えて鬼と女性とを結びつける。また和歌で詠われたように、見える「鬼」は祓えても、見えない「心の鬼」は追いやりようがない、という認識は、『源氏物語』においては、己の「心の暗部」（闇）を認め、それを抑え込む、もしくは逃れたい、という葛藤を描くことにつながっていく。絵として描かれる地獄の獄卒の鬼も、「心の鬼に」（心の鬼のために）自身が苦しむ、追いつめられる、という物語のあり方と関わる可能性があろう。

また『源氏物語』における用例の検討では、密通事件とものけ、この大きな二つのテーマを描くにあたり、効果的に「心の鬼」の語が女性の心中に配されていることを確認した。「鬼」自体は、基本的に主人公の生活圏外に発生するものの、「心の鬼」は都にいる高貴な人々の心内に生じて留まり、当人を苦しめる。そのことは、主に語り手によって語られ、あるいは、他者により「心の闇」を見透かす形で記述される。物語では、密通事件とものけ事件が、ともに繰り返し描かれるが、それら物語の質的差異が、「心の鬼」の語によって示されているのである。

最後に、抑えきれずに「もののけ」となって他者に向かうこともある「心の鬼」ではあるが、自ら「鬼」に喰われてしまいたい、と願った浮舟は、実際「心の鬼」（後ろめたさ）を感じていたのであろうか。浮舟の自照性が顕わになるのは、小野の地における手習いからと考えれば、やはり薫の視点で語られる浮舟の「心の鬼」は、そう思わずにはいられない薫の自己保身の言葉と考えてよいのではなかろうか。

注

1　用例数は、本文引用したテキストである新編日本古典文学大系『源氏物語』一～六に拠る。以下も同じ。また『源氏物語大成』及び『源氏物語別本集成』における確認ではあるが、尾州家河内本、保坂本は十四例である（尾州家河内本は藤壺の心中表現に、保坂本は小侍従の心中表現に、それぞれ「心の鬼」の語がない）。

2　早くは本居宣長が『玉勝間』で「からぶみ列子ノ注に、疑心生二闇鬼一、といへることあり、こゝろばへよく似たること也」と指摘している。実際『列子虚斎口義』や天台軌範にこの言葉が見られる。これらは宋代の注釈ながら、この諺が日本に古くから伝わっていた可能性がある。宋代以前の用例については、増田繁夫『源氏物語の人々の思想・倫理』（二〇一〇年、和泉書院）や石井公成「心を探る文学―『源氏物語』の唯心思想―」（『文学』二〇〇三年四月）に指摘されており、「心の鬼」＝「疑心暗鬼」の説であることは一定の支持を得ていると、井内健太『源氏物語』藤壺の密通における「心の鬼」について」（『国語と国文学』九三―八、二〇一六年八月）が述べている。ただし、「良心の呵責」の意もあてはまる例があり、一義的に決定することは難しいという。

3　ただし赤間恵都子「心の鬼」の解釈について―王朝文学の心情表現」（『十

文字国文』一八、二〇一二年三月）は、「良心の呵責」（自分自身を責める意味）と「疑心暗鬼」（相手を疑う意味）では、正反対の心の動きであり、『源氏物語』中、場面に応じて双方の解釈があてられることは納得がいかないとし、すべての用例に共通した他の意味があるのではないかと述べている。

4　森正人「心の鬼の本義」（『文学』二〇〇一年七月・九月）、注3赤間論文等。

5　注4森論文

6　注3赤間論文

7　馬場あき子『鬼の研究』（ちくま文庫、一九八八年）、小松和彦編『鬼』（怪異の民俗学四、河出書房、二〇〇〇年）等で指摘。「鬼」の文字は漢語由来で、中国では死者の魂の意。日本で畏怖される神と対になる「鬼」については『日本書紀』景行紀四十年七月に「また山に邪しき神有り、郊に姦しき鬼有り」とあり、神代紀下巻にも「諸々の順はぬ鬼神等を誅ひ」とある。また一つ目で人を食らう鬼は『出雲国風土記』「大原の郡阿用の郷」に「昔、或る人、此処に山田を佃りて守りき。その時、一つ目の鬼来て、佃る人の男を食ふ」、異形の鬼については『日本書紀』斉明紀七年八月一日に「朝倉山の上に、鬼有りて大笠を著て、喪の儀を臨み視る」とある。本文引用はすべて新編日本古典文学全集。表記は一部改めた。

8　和歌の本文は、新編国歌大観より引用した。ただし一部表記は改めた。以下も同じ。ただし、『賀茂保憲女集』のみ私家集大成からの引用。

9　『一条摂政御集注釈』（平安文学輪読会、塙書房、一九六七年）等。

10　河野小百合「「心の鬼」と「随求経」― 輔親集の歌をめぐって平安和歌における仏典の影響―」（『愛媛国文研究』五一、二〇〇一年）、杉浦和子「源氏物語における「心の鬼」―「人を責める鬼」から「己を責める鬼」の物語へ―」（『上智大学文化交渉学研究』一、二〇一三年）

11　注4森論文

12　注4森論文の解釈に従った。注10河野論文では、「心の鬼」を輔親の心（「すいい（く）」の在処を知っているが教えない）とするが取らない。

13　森正人「紫式部の物の気表現」（『中古文学』六五、二〇〇〇年六月）

14　新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』二九一頁

15　新編日本古典文学全集『枕草子』一二九段、二四四頁。以下、『枕草子』の引用は同書。

16　馬渕和夫『和名類聚抄古写本・声点本本文および索引』（風間書房、一九七三年）〔　〕内は割注表記。

17　室城秀之校注『うつほ物語』改訂版（おうふう）より引用。以下『うつほ物語』の引用は同書。ただし⑧の例、室城秀之校注『うつほ物語』改訂版は、底本に「幸ひのおに」とあるところ「幸ひのなき」と改訂する。

18　新編日本古典文学全集『伊勢物語』五八段「荒れたる宿」一六一頁

19　新編日本古典文学全集『大和物語』五八段「黒塚」二九〇頁

20　新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』下巻「天禄二年十二月」二六八頁

21　新編日本古典文学全集『平中物語』二七段「親の守る人」五〇四頁

22　新日本古典文学大系『落窪物語』「第三」二一二頁

23　私家集全釈叢書三七『大斎院前の御集』（風間書房、二〇〇九年）の訳を参照した。

24　『法華験記』五七「鬼の害を遁れたる持経者法師」（日本思想大系）には、但馬国の山寺に宿泊した僧侶二人のうち、法華経を持っていない老僧の方を、鬼がつかみ割いて食したことが記されている。

25　田中貴子『百鬼夜行の見える都市』（ちくま学芸文庫、二〇〇二年）

26　新編日本古典文学全集『源氏物語』「帚木」一―六九頁

27　新編日本古典文学全集『源氏物語』「帚木」一―八八頁

28　新編日本古典文学全集『源氏物語』「帚木」一―九九頁

29　新編日本古典文学全集『源氏物語』「夕顔」一―一六一頁

30　新編日本古典文学全集『源氏物語』「夕顔」一―一六八頁

31　新編日本古典文学全集『源氏物語』「若菜上」四―一九八頁

32　「……うち捨てたまひて、かく行く方も知らせたまはぬこと、鬼神も、あが君をばえ領じたてまつらじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釈も返したまふなり。人にまれ鬼にまれ、返したてまつれ。亡き御骸をも見たてまつらん」（「蜻蛉」六―二〇六頁）「かかることどもの紛れありて、いみじうもの思ひたまふらんとも知らねば、身を投げたまへらんとも思ひも寄らず、鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん、いと昔物語のあやしきものの事のたとひにか、さやうなることも言ふなりしと思ひ出づ。」（「蜻蛉」六―二〇八・二〇九頁）「殿は、なほ、いとあへなくいみじと聞きたまふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などて、今までさる所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸いたくおぼえたまふ。」（「蜻蛉」六―二一五頁）「……鬼などの隠しきこゆとも、いささか残るところもはべるなるものを」（「蜻蛉」六　二三三頁）

33　「このもの怖ぢせぬ法師を寄せたれば、「鬼か、神か、狐か、木霊か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れたてまつらじ。名のりたまへ、名のりたまへ」と、衣をとりて引けば、顔をひき入れていよいよ泣く。「いで、あなさがなの木霊の鬼や。まさに隠れなんや」と言ひつつ、顔を見んとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりけん女鬼にやあらんとむくつけきを、頼もしういかきさまを人に見せむと思ひて、衣をひき脱がせんとすれば、うつぶして声立つばかり泣く。」（「手習」六―二八四頁）

34　新編日本古典文学全集『源氏物語』「手習」六―二九六頁

35　新編日本古典文学全集『源氏物語』「手習」六　三三〇頁

36　注10　杉浦論文では、「心の鬼に」という言い方を比喩的な連用修飾部とみなし、語り手の解釈を含み持った表現であるという。また注2井内論文では、「心の鬼は」という言い方が、「心の鬼」を独立した異物として認識する言い回しに対し、「心の鬼に」は、それを独立したものとみなさず、自身の心のありようの一つとして認めていく表現であると述べている。

37　「大将、頭弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしうおぼえたまひて、尚侍の君にもおとづれきこえたまはで久しうなりにけり。」〔光源氏〕（「賢木」二―一二七頁）

「御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。」〔光源氏〕（「明石」二―二五八頁）

「渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬをりなし。」〔光源氏〕（「常夏」三―二三四頁）

38　「かの御ためにとりたてて何わざをもしたまはむは、人咎めきこえつべし、内裏にも御心の鬼に思すところやあらむ、と思しつつむほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。」〔冷泉帝〕（「朝顔」二―四九六頁）

39　「内大臣の御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わが御方に入りゐたまへり。」〔夕霧〕（「少女」三―五二頁）

40　大谷雅夫「夢―歌語と詩語」（『文学』六―五、二〇〇五年九月）等。

《附記》

本稿は、平成三十年三月十一日に行われた明治大学日本古代学研究所主催の研究集会「文芸テキストから探る古代社会の〝こころ〟―時代とジャンルを越え

て－」（於明治大学）の発表をもとにしており、平成二十六年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（「日本古代学研究の世界的拠点形成」事業番号 S1411022 ）による研究成果の一部である。